OIS
大阪府インテリア設計士協会
〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553
URL http://jp-interior.or.jp/ois
blog http://oisblog.exblog.jp
E-mail ois@jp-interior.or.jp

HASHIRIGAKI 葉知利書

編集スタッフ
田原・石渡・広畑・河原・仲田
山本・朝日・園田・奥田・岡﨑

新年度だ がんばろう！
No.79

ロゴが変わりました。毎号季節の色になります。

挨拶する宮後会長

総会報告

4月24日(金)、難波OCATで平成21年度の総会が行われました。前年度の概況では、世界不況の波を受け、OISも受験者が減り財政的に厳しい一年であったが、見学会等を活発に実施し会員へのサービスに努めたと述べられて、また、今年は理事改選の年で、７名の新理事が誕生するという明るいニュースもあり、本年度に期待の出来る総会であったと思います。(記･岡﨑正明)

※新理事の紹介は２ページをご覧ください。

乾杯！(交流会)

事業部会構成と上半期（4月～8月）の予定

事業部	1	2	3	4	5	6
内容	受験推進 検定関係	講習・講座 見学会	広報・宣伝 (葉知利書)	事遊展 OISサロン	関係団体 財務・親睦	かぶだち 青年
責任者	千田	河野	田原	梅田	南野	今西
事業予定	6月説明会 7月検定試験 9月伝達式	6月名塩和紙見学会 7月見学会	5･8月葉知利書発行 パンフ企画	7月サロン	5月ゴルフ 7月ビアパーティー	5月・7月 青年部会

新役員一覧

役職	氏名
会長	宮後　浩（再　任）
副会長	千田　俊治（〃）
〃	南野江以子（〃）
〃	今西　隆次（前常任理事）
専務理事	奥田　忠彦（再　任）
常任理事	河野　洋二（〃）
〃	梅田　澄徳（〃）
〃	田原　妙子（〃）
会計理事	石渡　由華（〃）
理事	五代　晋一（〃）
〃	森　一芽（〃）
〃	仲田貴代史（〃）
〃	山田　弘美（〃）
〃	広畑　直子（〃）
〃	山本　哲央（〃）
〃	河原　順子（〃）
〃	瀬部　明（〃）
〃	吉矢　祥子（〃）
〃	朝日　勝彦（新　任）
〃	加茂多紀子（〃）
〃	隈井　健二（〃）
〃	栗山　保幸（〃）
〃	園田　寛明（〃）
〃	高尾　千寿（〃）
〃	藤川　寛子（〃）
監事	疋田　友一（再　任）
〃	福田　幸市（〃）
顧問	高橋　宏至（〃）
〃	平井　進（〃）
〃	植田　益夫（〃）
〃	疋田　友一（〃）
参与	渡邊　敏雄（〃）
〃	中島　伸雄（〃）

会員の心をつなぐ“事遊展”

会場風景

昭和61年(1986)にスタートして以来１年に１回を目標に継続開催してきた“事遊展”の平成20年度分を平成21年4月10日(金)～12日(日)の3日間、大阪市立難波市民学習センター・アートスペースで開催した。

20年度の事業が21年度に入って実施されたのは、当初の予定であった昨年暮れに、加盟しているUSD-O(大阪デザイン団体連合機構)とのからみで「日本の空間デザイン展2008」に協賛出展したためにずれ込んだものである。

今回の“事遊展”には空間展に出展した10人15点の「事」部門作品に、新たに1人1点の「事」＋10人25点の「遊」が加わりトータル17人41点の作品が展示された。

例年設けられているテーマが今回はなかったこともあり作品数は少なめだったが、整然と飾られた会場には一種の気品がただよい、また、パネル作品が多く机上に置く作品が少なかったため、急きょ考案された製図板４枚による作品の間仕切りを兼ねた衝立も一つの作品として見ることができたといえるのではないだろうか。

製図板による衝立

来場者は決して多くはなかったが、定番の事業を一つ終えられたという満足感は十分味わえたような気がする。

(記・奥田 忠彦)

★新理事の自己紹介★

★順不同

①氏　名
②仕事の内容
③趣味や現在ハマっていることなど
④OISに対する希望(何がしたいかなど)
⑤その他ひとことコメント

①朝日勝彦(あさひかつひこ)
②建築意匠デザイン設計
③仕事
④今までの経験を生かして楽しく貢献したいと思います。
⑤皆さん、自己成長が出来るOISに、すすんで参加してください！

①隈井健二(くまいけんじ)
②建築企画設計
③『仕事』のような気が･･･
④いろいろ参加しながら、楽しみたいと思います。

①栗山保幸(くりやまやすこ)
②住宅設計
③サックスを習っています。
④参加しやすい日程が増えるといいなぁ。
⑤神出鬼没ですが、よろしくお願いします。

①園田寛明(そのだひろあき)
②パース作成やデジタルもの
③デザインをすること。ライブへ行くこと。ガチ買物。スノボー。写真。騒ぐこと。
④人とのつながりや、自分の知らない世界を見て、楽しみながら成長したい。
⑤No music　No Life！
音楽がないと生きていけません（たぶん）

①高尾千壽(たかおちず)
②建築設計
③こわれているもの・キズついたもの・汚れているものをきれいにする(直す)こと。
④それをこれから見つけたいと思います。

①加茂多紀子(かもたきこ)
②造り付け家具・オリジナル家具の設計・製作・施工
③夏はスキューバダイビングとボディーボードをします、あとガーデニングも大好き。
④久しぶりに参加しても知ってる顔が多く安心しました。多くの方が長く在籍して下さることを望みます。
⑤お酒は飲めません

①藤川寛子(ふじかわひろこ)
②CAD図面作成
③飲むこと・食べること・映画(洋画)・テニス(最近ですが･･･)
⑤タイミングが合いづらく、あまり参加は出来ないと思いますが、可能な限りお手伝いはさせていただくつもりです。どうぞよろしくお願い致します。

落語家と行くなにわ探検クルーズ

3月28日(土)

“きらり号”と乗船場

テンツクテンとお囃しにのりまして現われましたのは噺家・桂きん太郎という男。「落語家の中で金髪は小朝と私の二人だけや」と自慢しております。さて、今日はどんな案内をしてくれるのか楽しみです。

我々が乗船するのはJRなんば駅にほど近い湊町リバープレイス桟橋が乗船場であります。お花見クルージングという触れ込みで参加したのでありますが、なんとも寒ぶ～い、寒ぶ～い日になってしまいました。さくらは一分か二分咲き程度で、とても花見どころではありません。

しかし、悪い話ばかりではありません。今日乗りますこの船は我々が初めてという、処女航海ならぬ、処女遊覧といったところで、新しく造られたこの船は40人～50人乗りの小振りではありますが、いろいろな仕掛けがあるという話で、楽しみにしております。

17時出航で、すぐに弁当が各自に配られ、ビール、お酒、飲み放題になっていますが、ブルブル震える手でビールをついでもらい、船は道頓堀川を下っていくのであります。ほどなく道頓堀川水門に入りました。尻無川、木津川と１ｍ以上水位が違うこともあるようで、ここで船の前後の水門を閉じ、行先の水位に調整して船が進んでいることを、初めて知りました。船から見る「京セラドーム」、夕日にはまだ早く、明るい陽を浴びて川辺を滑るように走って行くのであります。大阪に生まれて何十年となりますが、船に乗って街を観るというのは初めての体験です。女房と２人で参加したのも初めてで、今回は初めてづくしになりました。

桂きん太郎さん

船内からグリコをパチリ！

船は木津川から堂島川へと進んでまいりますが、大阪には今でも八百八橋といわれるほど、それに近い橋が架かっているそうです。中でも淀屋橋や戎橋など、橋底が低い橋があります。そのような橋を通過する時は、船底に水を溜め込み、船を低くする仕掛けになっているのであります。水面に近い目線で景色を見るのも、またいいものですなあ！

そうこうしていると、ガラス張りの天井が後方にスライドして全開になり、さらに外の空気と一体になって、気持のいいところなのですが、今日は寒さに耐えて、景色に見入ってあっという間の１時間45分の遊覧。大阪も見捨てたとこやおまへんで！　皆さんも一度体験しはったらどうでっか！　OISさんほんまにありがとさんでおます。（記・宮本 誠三）

見学会 報告

◆旧西尾家住宅◆

3月28日（土）

旧西尾家正面

旧西尾家住宅（現吹田文化創造交流館）の見学は花冷えの午後でした。今は吹田市の中心部、交通も便利な市街地という環境の中ですが、淀川から分流する神崎川や相川にも近く、かつては江坂、庄内へと続く湿地の農業地帯であったことが、敷地内に小舟を繋留する設備があることから窺えます。

この地は仙洞御料と称される天皇を退位した上皇の御料で、西尾家は4代、7代～10代と庄屋を務めたといわれ、計り部屋棟や創建当時そのままの米蔵が現存しています。

現在の建物は数代の時代の流れを経た結果の主屋、茶室、和式・様式の離れ、四阿、土蔵等で構成され、その建物から長年にわたる文化人の暮らしぶりや歴史が肌で感じることが出来る一面も兼ね備えています。

数奇屋風を取入れた主屋は紀州・貴志家の関係もあってか、母屋棟大座敷の建築材には素晴らしいものが使われ、伝統ある庄屋としての基本は勿論、数多くの文化的来客に対処出来得るしつらえ、又、対応に係る人々の生活の場を含めた構成となっています。

茶　室　内　部

茶道藪内家の10代休々斎（きゅうきゅうさい）と藪内節庵の指導になる茶室「積翠庵」と露地、書院庭には卍型に配置された四腰掛のある四阿。各地の有名な灯篭の写し、自然そのままの鴨石を縁石として使った庭先、また五輪塔の石や長大厚の石材を敷石にと、豪華で貴重な材が贅沢に自由奔放に使われ、感性の素晴らしさとともに当時の一端も窺えました。

離れは京都・大阪の建築物や橋等を数多く手掛けた、有名な建築家武田五一が和洋折衷の意匠を試みたものといわれ、洋風棟は建物外観からは想像も出来ない、暖炉・ステンドグラス・サンルーム・寄せ木の床などのしつらえ。また、和風棟への勾配付きの渡り廊下の綱代天井、和風棟玄関の丸窓、脚部のない腰掛け等記憶に残るものが多くありました。

天折の音楽家貴志康一の誕生の地でもある西尾家、折りしも洋風棟ではトロンボーンによる四重奏の練習が行われており、この地に生まれた人の文化が今も日常に中に受け継がれているのかなとも感じました。

12代西尾與右衛門と深い親交のあった植物分類学者・牧野富太郎が関与した２階建ての温室もあり、かつては洋蘭等が栽培されていたようですが、戦時中ガラスの反射が攻撃目標になるとのことで壊され今はその基礎部分だけが残されています。

ともあれ、旧西尾家住宅は近代の知識人の暮らしが見事に反映されていて、生活史や文化史を体現できる建物として大きな価値のあるものです。近年傷みも進み２階へは登れないとのこと、また酸性雨による銅製雨樋の腐食もひどくなっているようですが、長い時代の一時を担った建物として、末永く保有しておきたいものです。　（記・稗田　真治）

参加者は19名でした

KIS企画
京都府インテリア設計士協会

◆何有荘◆
（かいうそう）

3月14日（土）

洋　館

以前に見た平安神宮神苑の他に、小川治兵衛の作庭を機会があったらぜひ見たいと思っていた時に、今回の見学会である「何有荘」の池泉回遊式庭園が彼の作庭と知り参加しました。想像以上の広い庭園（約6,000坪）に圧倒されました。

庭園で最も印象深かったのは本堂前の大地に流れ落ちる「端龍の滝」で、しばし釘付けになりました。東側から石段を渡ると残月亭に至ります。私は、この東側の壁面にある意匠を凝らした大きな円型の地窓が気に入りました。下地を竹でススキに、円窓を月に見立てた、実に趣のある窓でした。展望台への途中に、竹の支柱の洞窟を通り抜けましたが、何か不思議な初めての光景でした。見晴台にある草堂からは、遥か彼方に北山の山並みが見え、眼下には見覚えのある南禅寺の三門が見えます。

茶道への道の石や沓脱石、流れる水、滝、そして美しい苔、見渡す限りの手入れの行き届いた庭園に、本堂の濡れ縁に座って見入ってしまいました。

染色界の実業家・稲畑勝太郎氏（当時は和楽園）や、後に宝酒造の大宮庫吉氏がこの庭園を守り続けたからこそ、今、こうして美しい庭園を見ることが出来るのだと、感謝の気持が湧きました。そして、文化活動の交友の場として広く活用されてきたとの話を聞き、うなずけました。

瑞　龍　の　滝

残　月　亭

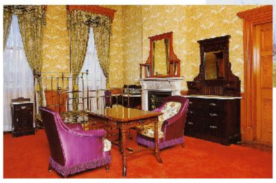
また、中国から渡ったてきと思われる「寝台」の組立実習では、透かしの彫刻やシルク絵等、興味深いものも見ることができました。

今度は、新緑や紅葉の美しい季節に訪れたいと思いながら「何有荘」を後にしました。　（記・佐藤　登美）

寝台組立のようす

旧函館区公会堂

青年部部長
瀬　部　　明



貴賓室

バルコニー

さて、私のお気に入りとして今回ご紹介するのは、北海道函館市の「旧函館区公会堂」です。歴史的背景からすれば、函館は横浜や神戸と同格と言ってもいいのかもしれません。西洋文明の玄関口であるこれらの地には、街のイメージとして何となく共通したものが感じ取れると思います。その函館の活気がみなぎっていた明治後期に建てられた建物が、「旧函館区公会堂」です。

冊子によると、明治44年に完成、昭和49年に重要文化財に指定された、とあります。そろそろ築100年を迎える木造建築物です。いわゆる「擬洋風建築」と呼ばれるもので、当時の設計士や大工棟梁たちが、先行して建てられた洋館などを見学して、「こんなんやろなぁ。こんな風にしといたらええねんやろなぁ。」と言いつつ自分なりに消化吸収して作り上げたものでしょう。有名なものでは、松本市の「開智学校」が挙げられます。外観も内装も完全な「洋風」ではなく、随所に日本的要素が盛り込まれています。

旧函館区公会堂は、青灰色の壁に黄色の柱という外観色彩の奇抜さにまず驚かされます。私は夏と冬、両方訪れましたが、どちらでも清々しさを感じました。しかし、勇気ある色彩計画ですよね(笑)。視線がそれ以上に上がらず、擬洋風の大きな特徴である瓦屋根ということに気がつきませんでした。内部装飾、特に私は階段や２階大広間の細部意匠に惹かれました。家具調度類も、当時の職人が東京からカタログを取り寄せて自分なりに解釈して作り上げた、と冊子にあります。それ故に装飾が過多になっている部分もあるようですが、これも木工技術の高さのなせる技と言えるかもしれません。

ほぼ全員が自ずと２階のバルコニーに出て、函館の旧市街地を見下ろします。耳を澄ませば、路面電車の走行音が聞こえてきます。鹿鳴館風の衣装のレンタルもあり、写真撮影もしてくれます。間違いなく、大広間で踊り出したくなるようです。

名塩和紙見学記

日本の文化を支えてきたすごい和紙が、こんな近くにあったのか。これが最初の印象でした。越前和紙などはよく耳にしていたのに、兵庫県西宮の名塩和紙の名は知りませんでした。400年近い歴史を持ち、今も各地の文化財や貴重な建造物の修復に貢献し、襖の下貼りや障壁画に用いられています。また梅原龍三郎氏などの日本画家にも愛用されています。

雁皮にいろいろな色の岩石の粉を一緒に漉き込む和紙は、全国で名塩だけです。間似合紙と呼ばれ、変色しにくく、経年による縒れや反りが少なく、防虫防燃効果があり、また絵の具の発色もいい。金屏風の下貼りにすると光沢に味わいがあり、さらに金色が冴えて来るそうです。ほかには、金箔の箔打ち紙もあり、有名です。

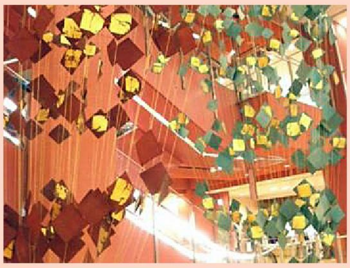
かって100軒近くあったのが、今は２軒のみとなり、その1軒、無形文化財で人間国宝の谷野剛惟さんの工房を見学する機会を得ました。溜漉きという工法で、岩石泥と和紙原料の入った漉き船に中腰で覗き込むように簾桁をくぐらせて、腕だけで上げて水を落とします。それも簾桁二段重ね。すごい力です。

←谷野さん

見学会同時募集！
今回、同封案内状のとおり、谷野さんの工房を見学します。多数のご参加をお待ちしております。

原料や工程、歴史、作品を丁寧に説明していただき、また実際に名塩和紙を使用したご自宅を見せていただきました。知る人ぞ知るで、企業や海外からの見学者も多数来られるそうです。

古いものを守るだけでなく、新しい和紙作品へもチャレンジされていて、阪急西宮ガーデンズの吹抜けの美しいオブジェも谷野さんの作品です。谷野さんの情熱に触れ、この素晴らしい地場産業を知り、ぜひもっと皆さんに知ってもらいたいと思いました。　　　（記・田原 妙子）



阪急西宮ガーデンズの作品